

第23回狭山市民芸術祭を終えて



想えば3年前 2020年、20周年記念の芸術祭終了直後から、新型コロナウイルスに対応して全国的に自粛生活が始まり、公演、イベントなど、全て中止というかつて体験したことのない耐乏生活をやむなく過ごしました。あれから3年、不安は残るものの今年はやっと従来通りの形で開催出来ることになり、テーマを「#さやま」として各団体、スタッフ一同張り切って準備を進めて来ました。

市民会館玄関ホールでは「さやまの春」と題したお迎え花に、早速記念写真を撮る方、しばし立ち止まって見とれる方、皆さまに春を満喫していただきました。

展示会場は多くの力作や楽しい手工芸が並び、特別展示の令和版かるたは池原昭治氏の絵札と市民から選ばれた読み札が並べられ、展示部門全体では述べ1,800人程の来場者で賑わいました。



またお茶席では感染予防として、お客さま6名を一席として、全席分のお茶碗を用意し、ゆったりと楽しい会話と美味しいお菓子で、優雅な気分も味わっていただきました。

25日(土)の小ホール公演「世代を超えて」では、各団体コロナに翻弄されながらも頑張って練習を重ね、10団体が満を持しての演技を繰り広げました。

翌26日(日)芸術祭最終日、中ホールでの企画公演「かるた de さやま」は各団体の演技を織り交ぜながら「狭山」の風土や文化、歴史などを「おりぴい」と共に楽しく紹介し、豪華な舞台美術や映像で芸術祭を締めくくりました。



来場者アンケートにも「狭山にこんな歴史があったなんて知らなかった」、「親戚にも犠牲者がいたと聞いた(笹井の戦災)」、「素晴らしかった」、「狭山は凄いことをしていますね」などの声を寄せていただきました。また「スタッフのみなさんの対応が優しくて素晴らしいです」などと声を掛けていただき疲れも一気に吹き飛び、心も軽やかに第23回芸術祭を閉じることが出来ました。皆様本当にお疲れ様でした。 “ブラボ〜!”

第23回狭山市民芸術祭実行委員会
実行委員長 竹迫ミナミ